

暴かれた真実。業界黙示録

「暴かれた真実・業界黙示録」は、実際に起こったパチンコ・スロット業界の事件・詐欺・摘発などをもとに構成された実録風ドキュメント連載である。登場人物や店名は仮名化されているが、事件の内容は極力事実に基づき構成されている。閉ざされたホールの奥で何が起こっていたのか――いま、その真実が暴かれる。

File.14 実録・島に潜んだ影――福井・某ホール基板潜入事件の記録

■信頼という名の投資

2009年2月。福井県大野市の国道沿いに建つ中規模パチンコ店に、一人の若い男が履歴書を持って現れた。大阪市内に住む32歳。職歴に空白が目立ち、特段の資格もない。しかし、採用の決め手になったのは、面接での受け答えが驚くほど素直で、「どんなに泥臭い仕事でもやります」という謙虚な姿勢が、当時の店長の目には「再起をかける誠実な若者」と映ったからだ。

地方の中規模ホールにとつて、アルバイトの確保は慢性的な悩みだった。若者は都市部へ流れ、せっかく採用しても数ヶ月で音信不通になることも珍しくない。そんな中で、真面目そうに見える人材は「掘り出し物」であり、まずは使ってみる。それが当時の現場における切実な論理だった。男はホールスタッフとして採用され、島の清掃や吸い殻の回収・玉詰まりの対応から、パチンコ台の簡単なメンテナンスへと、着実に仕事の幅を広げていった。

遅刻は一度もない。客からの理不尽なクレームにも、感情を抑えて丁寧に対応する。

先輩スタッフの指示を忠実に守り、休憩時間も他のスタッフとのコミュニケーションを欠かさない。入社からわずか数ヶ月で、店内で誰もが認める「欠かせない戦力」として認識されるようになっていた。店長は、この男の働きぶりを見て、将来の幹部候補として正社員に登用することを決めた。2009年5月のことである。

後に店長は捜査関係者にこう語っている。「彼は誰よりも早く出勤し、誰よりも遅くまで店に残っていた。一生懸命働いていたので、まさかと今でも信じられない」。この言葉の重さは、事件の全容が明らかになった後、裏切りという毒となって業界関係者の間にじわじわと染み渡っていった。

正社員になった男は、さらにその献身性を加速させた。台の挙動が少しでも不安定であれば率先して確認し、閉店後の過酷な点検作業も嫌な顔一つせず引き受けた。上司の信頼は、もはや盤石なものへと積み上げられていた。そしてその年の12月、男は開店前に遊技機の制御基板に異常がないかを確認する役職へと昇進した。台の「心臓部」に、誰にも疑われることなく、正規の手続き

として、たった一人で触れられる立場を手に入れたのである。

組織の側から見れば、これは長期にわたる「投資」の回収フェーズへの移行を意味していた。アルバイト入店から実に10ヶ月。潜伏を続けていた男の携帯電話に、潜入を指示した組織から短い連絡が入った。

■分業された悪意

この事件の特筆すべき構造は、男が単なる単独犯ではなく、極めて高度に組織化された犯罪チェーンの一環であったという点にある。

捜査が進む中で浮き彫りになったのは、軍隊のように緻密に役割分担された組織の存在だった。ピラミッドの頂点に立つのは、表舞台には一切姿を現さず、連絡も使い捨ての端末のみで行う「指示役」。その下に、遊技機の弱点を突き、解析不能に近いレベルで不正基板を製造・調達する「技術担当」、ターゲットのホールに潜入して基板を交換する「実行役・潜入役」、そして交換済みの台から実際に出玉を回収し、現金化する「出

く、業界の厳格な「日常」から訪れた。

2010年2月、ホールは大規模な新台入替を実施した。新台入替の際、古い台を撤去してメーカーに返却、または中古業者に回す際には、基板の番号や状態を厳密に照合する手順がある。撤去作業中に台の心臓部を覗き込んだ外部の専門業者が、異変に気づいた。

「この基板、ハンダの状態がどうもおかしい。メーカーの正規ラインで通つたものじゃない」

その一言が、全てを崩壊させた。確認が進むにつれ、複数の台で不自然な配線の取り回しや、偽造された封印シールが次々と見つかった。警察への通報が行われ、押取された基板の鑑定結果が「不正改造」と確定した瞬間、男はすでに店から姿を消していた。

逃走は決してスマートなものではなかった。発覚を察知した男は、身の回りのものも持たず、福井の雪深い道をあてもなく逃げた。しかし、長年にわたり彼自身が「管理」していたはずの防犯カメラには、深夜の点検作業を装って基板を交換する決定的な瞬間が、鮮明に記録されていた。

捜査は迅速に進み、同年10月、男は窃盗容疑で逮捕された。彼の供述から芋づる式にルートが判明し、12月には基板製造のブロである指野も逮捕された。しかし、暗躍した「指示役」の正体だけは、トカゲの尻尾切りのように闇へと消えた。組織の末端だけが冷たい法廷に立ち、中核は今もどこかで別の「駒」を育てているかもしれないという

し子」が配置されていた。

それぞれが互いの氏名も素性も知らず、全体像を把握させない。必要最低限の情報だけが川上から川下へと流れる、分散型かつ細胞型の組織形態である。

不正基板を用意したのは、大阪府和泉市に住む自営業の男、指野和昭（51歳・仮名）だった。彼はかつて遊技機の周辺機器開発に関わっていた経歴を持ち、制御プログラムの隙を突くことに精通していた。彼が夜な夜な製造した不正基板は、複雑な中継ルートを経て潜入役の男へと渡された。

2010年1月。男はついに「仕事」を開始した。開店前の静まり返ったホールで、点検作業を装い、人気機種を含む3機種10台の主制御基板を、用意された不正改造品へと差し替えた。作業は熟練の技術者もかくやというほど迅速かつ精密に行われ、封印シールも巧妙に偽装され、目視では痕跡すら残さない。交換を終えると、男は特定の隠語を使って指示役へ完了報告を入れた。

翌日から、そのホールには見知らぬ人物

恐怖が残った。

この事件が業界に突きつけたのは、「採用」というプロセスの根幹を揺るがす問いだった。履歴書からは読み取れない過去の繋がり、面接の笑顔の裏に潜む目的。地方のホールが「真面目そうな若者」を歓迎するという善意で、犯罪組織はあざ笑うかのように利用した。

事件後、業界全体で従業員の身元確認の徹底、二名体制での基板確認、最新の画像認識による不正検知システムの導入が急ピッチで進んだ。しかし、どれほど技術が進化しようとも、人間の「信頼」をハッキングするという手口を完全に封じ込めることはできない。

店長は、事件の整理がついた後、しばらくの間、新しいスタッフの目を見て話すことができなくなったという。 「一生懸命働いていた、あの姿さえも偽物だったのか」

その問いに答えが出ることはない。失われた1000万円という金銭被害以上に、共に汗を流した仲間を疑わざるを得なくなった現場の精神的疲弊こそが、この事件が遺した最も残酷な爪痕である。

福井県大野市の国道沿い。かつて事件の舞台となったその場所を通り過ぎる人々は、今ではそのホールが抱えた「見えない侵食」の記録を知る由もない。日常の風景に溶け込んだ「信頼」という名の砂椋が、いかに脆く崩れ去るか。この記録は、パチンコ業界が歩んだ浄化の歴史の一片として、静かにここに刻まれる。

たちが「普通の客」として続々と来店した。出し子の仕事は、指定された台に座り、指示された通りに淡々と遊技することだ。不正基板が仕込まれた台は、特殊なボタン操作やレバーの入力パターンに反応し、強制的に「大当たり」の状態を引き起こす。

出玉が積み上がっても、ホールのスタッフは男を信頼しきつているため、データ異常の可能性を考慮することすらなかった。「最近、あの島の挙動が良いな」という程度の認識で、島のデータランプは不自然な光を放ち続けたのである。男が受け取った報酬は約100万円。組織が得た数千万という利益と比較すればあまりにも少額だが、潜入というリスクを負われた駒にとつては、それが自らの「市場価値」だと思いつまされていた。

■見えない出血

ホールの経営において、日々のデータから「人為的な不正」を察知することは、素人が考える以上に困難を極める。パチンコ台の出玉率は「確率」というブラックボックスの中にあり、数千回転、数万回転という試行回数の中で、時に信じられないような偏りを見せるからだ。

不正基板が仕込まれた10台は、約1ヶ月にわたって稼働し続けた。その間、ホールは静かに、しかし確実に内側から血を流し続けていた。特定の出し子が座った時だけ巧妙に出玉を吐き出すよう設定されているため、全体の割数（出玉率）を大きく逸脱しない程度に調整されていたことも、発覚を遅らせた要因となった。累積された損害は

男が粛々と出し子への台情報を送り続け、裏切りを重ねる一方で、ホールの日常は何一つ変わらずに過ぎていった。開店を告げるベルが鳴り響き、客が座り、玉が流れ、閉店の音楽が流れる。何も知らない同僚スタッフが笑顔で男に声をかけ、何も知らない常連客が、今日も汗水垂らして稼いだ金をサンドへと流し込んでいた。

■発覚、そして残されたもの

終わりは、組織の想定外の事態ではな